松竹梅三人娘

897

松竹梅三人娘

○第一回

維新の少し前までは本所松井町二丁目に住み刀釼の鑑定を業としたる戸田幸左衛門と曰へる松は妻の花君と夫婦の中に松（三十四）といへる長女がありて後せた妻が懐妊したれば今度は男子と思ひの外産のも〳〵女の兒にて都合三人の娘を擧け些失望いしたれども是も定まる竹事と斷念め二女れ竹（三十）三女をお梅（二十七）と松竹梅の名を負せ蝶よ花よと養育しが幸左衛門梅は業体にて諸藩へ手廣く立入る中に或諸侯の重臣にて原田信久と言へる人は頗る刀釼好なれば自から目も利ゆゑ古刀の賣物などあれば此家に携へ行て同氏に鑑定を請ふ事もなり

三

り幸左衛門は一花主として別て懇意に出入をせしかば或日また例の如く原田の許へ[illegible]

八

に折から同藩士なりといふ塚原重左衛門が來合せ咄しの後が酒となりおの〳〵微醉加減にて暇を告て立出る時彼塚原は幸左衛門に打對ひつゝ小聲にて斯く御懇意になるからは醉を

娘

盡してお互ひに打解咄しも致したけれど原田は當家の重役ゆゑ天窓が問へて何とやら呑だる酒も浮兼れば何所ぞで寛りと飲直さふ御迷惑でも御一緒にと袖を捕へて引張られ振切る事もなり難さに深川なる假宅の地にて其頃深川亭と言ひし割烹店に連られ行きしに塚原が

五

馴染と覺しきれ圓といへる藝妓を招き最も陽氣に騷ぎしが幸左衛門其座へ招きし藝妓お圓

戀中ハ磯なれの松のえたならて

すねた所よおもしろみあり

六の縹致と云ひ取廻しといひ寸外抜目のあらずして客を浮せる調子の旨さに常には堅[illegible]

左衛門も覺ゑずも興に入り醉を盡して歸りし後もッヒ面白さが忘られず獨折〳〵遣て[illegible]

はれ園を呼で酌をさせるも根が野暮ならぬ幸左衛門ゆゑ金も奇麗に遣へるのみか浮風[illegible]

松　なき客振にれ園の方から乘地になつて早晩妙な交情になると彼塚原重左衛門は豫てお園に

心が有て種々手を曳ては口説ども品よく其場を言做しては上手に逃て仕舞はるゝを最もど

竹　かしく思ふより若も情夫でも他にあるかと探つて樣子を考へれば思ひがけなき幸左衛門と

梅　情由ある体に聞込たるに呆るゝばかり打驚き渠は日外我が伴ひて始めてお園に逢せしに素

三　奴を我が手に掛てれし片付る其時は鼻毛を抜かれた遺恨も晴れ又二ッにはお園とても他に

情夫が亡失たら自然と己になびくは必定這は両全の計策とよしなき惡意の胸に浮びて或夜

人　件の幸左衛門が深川亭の歸掛け醉たる酒を川風に醒しながらに歩行來たるを覘ひすまし

塚原が聲をも掛ず脊後よりヒラリと引抜く一刀にて肩先深く斫下げられァッと叫んで倒る

娘　〳〵所を踏跨がりて思ふ儘止めの刀を刺通し血の垂る刃を拭ひもあへず人もや來ると重左衛

門は慌て开所を逃去たる翌朝近所の者が見認て訴へに及びしかば檢使もありて改められし

ュ獅子ュ牡丹の高彫せし小柄が死骸の傍に落散ありしが手掛りのみ夫とても何者の所持品

なりとも定かならねバ妻のれ君は本夫の死骸を涙ながらに引取て手厚く埋葬せし趣きをれ

園は聞て打驚き獨り窃かに考へ見るュ死骸の邊りに恁々の小柄が落てあつたと言ふが日來

塚原重左衛門が差て來る脇差の小柄が餘り奇麗なゆゑ日外ァィと見た所獅子に牡丹の金の

松　高彫若や私と幸左衛門さんが情由のあるのを嗅知て戀の叶はぬ意趣晴しに酷い事をば爲を

竹　つたか然ある時には我が爲に大事なお方を殺させて阿容〳〵見ては居られぬ場合篤と實否

を探つた上是非御鬱憤を晴さねば義理が濟まぬと一筋に婦人ながらも丈夫の魂ひ思込みつ

梅　〳〵居るぞとは心付ざる塚原は幸左衛門を殺した當座は疵もつ足の姑くは他行も慎み居たり

しが疑ふ者もなき体なるに最う宜からふと我から許して深川亭へ遣て行き例のお園を呼寄

三　せて生いやらしき素振をそるを風に柳と受ながら竊かに脇差に目を注見るに常ュ目馴し小

人　柄はなくて他の小柄のさし替あるュ彡偖はと胸を轟かしたる此段落は如何ならん开は又次

を看て知らん

娘

○第二回

お園も扨はと思つたが尙もトックり探つた上と態と其夜は打解たる思はせ振の嘶しなき言

掛る言の序ュ貴郎は常例ュお脇差へ大層奇麗なお小柄を差てはれ出なさつたが何でお癖ュ

七　遊ばしたと聞はれて胸ュギックり來たを然あらぬ体ュて笑ひに紛らしィヤナニ那は酒ュ醉

十ひ途中でフイと落した。ではなく。實い餘儀なく無心を言はれ他へ讓つたと曖昧なる跡先揃はぬ返答にいよ〳〵這奴がした所爲よ相違はないと思つた故何樣して呉んと氣は急迫ど何をいふよも先は武士かよわき女の痩腕で仕損じてはと思ふより欺すに手なしと工夫して色

松 に事寄せ種〳〵と辭を設け勸める酒を放心〳〵飲だ重左衛門が泥の如くに醉たるを今宵は

竹 奥の小座敷で帶紐解てゆつくりと寐てれ咄しをと手を捕られコリヤ堪らぬと其儘よ肩よ取付き伴なはるゝを準備の臥房へ助け入れば醉倒れたまゝ塚原は前後も知らぬ高鼾を爲すを

梅 したりと打笑たるれ園尙も寐息を窺ひ重左衛門の枕元よ置たる例の小脇差を窃かよ取て次へ立出拔放し見て身搏へなし慄へる足を踏〆ながら再び渠が枕邊へ忍び寄つゝ屹度見て幸

三 左衛門さんの怨みの刄受て見よと言ながら咽喉を目掛て刺んとせし拳狂ふて頰先より耳の根元へ突かもりしに吃驚しつゝ刻起れば仕損ゑたるかと又一太刀慌て斫込む尖先を醉眼な

人 がらも遺は武士身をかはしつゝ打落し捕へて膝よ組敷はづみよ傍の行燈蹴倒して眞暗がり

娘 よなりしかゞ塚原ハ聲振立狼籍者を召捕たど燈火を逸くと叫びしを同家の主人が聞付て屋人等と侶俱よ提灯携へ走來たり見れば園が塚原に押へ附られ居る体に打駭きつゝ種々と宥めて兎よ角内濟よと主人が辭を盡しゝかど憎い阿魔めが腕立と重左衛門は聞入れず遂に其節へ訴へたる故お園は忽地捕縛され引かれて調べを受るに臨みお園は爰ぞと思つた故

小柄を證據に幸左衛門が讐なる旨を言立しかば重左衛門も呼出されて再三吟味を遂られし時辭に詰つてろの小柄は拙者が所持の品なれど幸左衛門を殺害せし覺ゑはなしといひ張ど

松 も現在渠が死骸の傍に落散ありしは何故ぞと嚴しく詰問せられしに言解術のなかりしかば眞事は戀の遺恨にて殺せし旨を白狀せしかばお園は其場で放免せられ重左衛門は其儘よ獄

竹 屋よ繫がれ居たるうち處刑も待たで牢死なしゝは這は是後の事よして扨また幸左衛門の妻のお君は是等の事を聞よりも藝妓よ稀る義氣ある者と感じ入たる所より既にれ園が放免せ

梅 られて深川仲町へ戻りし夜態〳〵宅へ尋ね行きれ前が生命を投出して日ならず本夫の怨みをば報つて下さるれ心榮ふ禮は辭に盡されません就て甘へたやうなれど頼り拙ない私の身

三 体どうぞこのさき同胞の緣をむもそんでくださるまいかとたのむよお園もよろこびてのちと

人 も言はずろの座にて姉妹の盟ひを做しゝは元治元年の春なりしが偖もお君はれ園の力で轍く本夫の讐を報い遺恨を晴したるからは此上は三人の娘の成長を樂しみに女世帶を張通さ

娘 んと志操は厲ませど無商賣でハ活計されず然とて本夫の稼業筋は婦人で出來る事ならねば何樣した物と思案の折から或懇意なる同業が來て是ではお前も困んなさらふ幸ひ山田佐助

十 (二十五)といふは目も相應に利て居て年は若いが堅氣ゆゑ渠を雇つて是まで通りの渡世を遣

一 て見られてはと勸める辭の深切らしさにお君ハ夫も然うかと思ひ終に其人の周旋よて雇ひ

十二　入て使つて見るゑ成程とんだ耐忍人にて稼業筋にも抜目のあらねばれ君も漸次に心をゆるして萬事を渠に打任せると佐助も始めは主人の爲と心を用ひて勉強したるも常に金の融通の自由なるが身の毒となりフイと始めた娼妓狂ひも目立ぬやうな蠱遊興に商用なりと語魔

松　かしゐたるが夫等が爲に追々と多くの遣ひ込が出來最早自分の筆先でも帳面尻の伎倆が出

竹　來ねば事の露顯ゑ及し上不首尾で暇を出されるより毒喰はゞ皿の俚諺後家が非常の准備に

梅　と貯へて居る那金迄欺して攫ふが上分別と或日何所から持て來たやら袋入にて一寸見は立派な品と思るゝ白鞘物を携へ歸りれ君の前ゑ進み寄り此品は然る御大家のお拂ひ物と言事

三　にてなか〳〵の名刀なれば二百兩では堀出し物仲間の者に買はれるも憤懣と思つた故兎に角借ては參りましたが此間から種〳〵と仕入た品に資本を遣ひお店の金が拂底で只夫のみゑ困りますが見そ〳〵買へば儲かる代呂物一時貴女の御工夫で二百兩丈御都合はならない

人　でございませうかと眞事しやかに言捨へるを欺さるゝとは毫知らぬお君は須臾うち案じ知

娘　つての通り厄介な娘も多く居る事ゆゑ何ぞその時の爲ゑとて餘事ゑ遣はず二百兩貯蓄て居るなれば商業づくの意氣張で他人ゑ買はれて仕舞のを殘念がるも道理ゆゑ一時の事なら出しても遣らふが是は資本と混交ずに跡で私へ返してとて大切ゑせし命金の二百兩をば出して渡すを旨く行たと内心に歡びながらも然氣なく左樣ならば此金は先へ渡して參りまそれば此一刀はれ手元へ大事ゑれ仕舞置れてと言置て出た儘にて翌日になつても立戻らねばお君は深く怪しみて店の戸棚ろの外を取調べて見た所何時の程にか持出しけん是はと思ふ品もなく帳面の樣子では凡三百兩餘の不足に扨は丸々遣れたかと打駭く事限りなく就ては是な

松　る白鞘物も何だか譯が解らぬと直さま懇意な同業の方へ持て行て鑑定を頼むと是は仲間の

竹　賣買が三兩位の品と言はれれ君はいよ〳〵駭いて所々へ追人を出して見たれど更に行方の知れざるより佐助が宿として居る方へ種〳〵と掛合たれど何れにしても當人が出ませぬ

梅　うちは御挨拶がと逃口上のみ言はるれど到底這方が婦人丈手強い事も言かねて終に泣寐になつて見ると居喰で長く表店を張て居られる力もなさにお君は餘義なく同町の裏家へ子供

三　を引連て移りたり

人　れ君は佐助の惡巧みゑて丸〳〵財産を攫つて行かれ裏家へは引込たれど斯ても活計の立べ

娘　きならぬを例のお園が氣の毒に思ひ折〳〵來ては問慰め其度毎ゑ物なぞ惠をお君も开所に

は義理がある故宜事にして貰ひもされねば或日れ園ゑ打對ひ私もこんなゑ零落てけ大勢の

十　女の子を抱へて居られる譯ゑも行かねば何所ぞへ遣たく思ひまそがれ心當りもある事なら

三　れ世話をどうぞと頼まれたるれ園は須臾打案じ今阿母さんの手を離すのは實にお可憐想で

すがお骨の折るも見て居れば然う御思案が極たら二番目のお竹兒は私がれ貰ひませうと言ふお君は歡びてお竹はお園ゑ遣る事と決し長女のお松といふはは小間使の用も足りれば本所德右衛門町ゑ相應に消光す西倉彌左衛門と言者方へ子傅といふ名で奉公ゑ出し三女れ

松　梅はまだ幼少ゆゑ別て憫然ゑ思へども是も同本所相生町なる谷村角造といふ者から養女に貰ひ受たいとの相談を掛られて宅へ置くより此兒の爲と心を鬼ゑ手放して後はれ君が獨り

竹　針仕ごとなど手内職になしつゝも細〳〵と世を渡つて居るうち風邪が元にて煩ひ付たが病

梅　事十日餘りにて遂ゑ亡しく成行たれど他ゑ世話をする者もあらねば病中から死後までもお園が諸事を引受て葬式までも手厚くしたればれ竹は實母に別れて後はれ園を眞の母と慕へ

三　ばお園もいよ〳〵感然を加へて追〳〵諸藝を仕込で見るに器用な質ゆゑ覺もよく十五六にもなつた頃は何所へ出しても耻かしからぬ立派な腕になりさるとお園は少し老込氣味にて

人　殊ゑは近頃多病となれば遂ゑ藝妓を廢業してお竹を二代のお園と名告らせ一日弘めをさせて見ると縹致も藝も充分なるに氣立も初代のお園に似て面白いとの評判から座敷の虛間も

娘　あらざるを同業のれ茶挽描が嫉むばかりに流行て來るうち深川永代町の割烹店吉田屋から

して掛つた口ゑへ今晩はと出て見ると客は入船町の加賀屋の息子千次郎（二十五六）といふ者ゑて戯言交りの輕口も無駄を言はざる調子の好さゑお竹のお園も氣の利た客と思へば糊

にせず座敷を旨く取扱しをとんゞ面白い藝妓と思ひ其後も屢々口を掛ては或は芝居見物抔目に立所へ連歩行を豫て千次郎の馴染の藝妓で花吉と云婀娜者が夫と聞より大チン〳〵にて何時ゞは何時てか恥をかゝせ座敷へ顔の出されぬやうな思ひをさせて腹を慰やうと覘ひ

松　すましてゐたるうちフト吉田屋て此大一座ゑ折よくお園と落合たれば花吉は爰ぞと思ひ多くの客も居並べば同業の藝妓も居る中にて園ちやん一盃酌でお呉れ。何だチをかしい顔をして新妓のうちは座敷へ出てれ酌をするが分相應他の馴染のれ客をば盜んで玉を殖すやう

竹　な賤しい泥坊根生を今の歳から出すやうでは是おら先が思ひ遣られて一座をするも薄氣味

梅　が惡いなんど、種〳〵に口ゑ任せて毒づかれ根が氣の勝たれ園ゆゑ忽地ゑ勃として言返さ

三　ふとそる体を一座の藝妓は言ふに及ばず客も見兼て口を添へ騷ぎをせぬうち取鎭めた故其

人　場は夫形治まつたが口惜いと言ふ一念がれ園の胸ゑ充分あれば是より事を起をといふ其趣

きは次回にまた

娘

○第四回

滿座の中ゑて花吉に毒づかれたのがお園は口惜く先が姉さん株ゑもせよ此儘指を咬へて居

十　ては同業の前へも顔が立ない色は仕勝ゞ那花吉の鼻をはじいて笑つて遣らふと其後千次郎

五　に呼るゝ度ゑいよ〳〵手厚く取扱ひて頻りに思ひを運ばせたるより忽地深い交情となりて

飽まで實意を盡せしかば夢中になつた千次郎が有に任せて金を持出し目覺しきまで花美な遊興ゑ花吉も今はいや愚痴も怨みも言盡し果は呆れて泣止たるにお園も是で遺恨か晴たと歡びはした物の千次郎が金遣ひの餘り烈敷い所から兩親が立腹して遂に勘當なせしと言ふに退がのお園も駭いたが爰が藝妓の立引と初代お園ゑ譯を咄し千次郎をば引取て手厚く世話をする風聞が他の客の聞ゑ入本夫持では面白からずと口を掛るも拙くなりて以前の景氣十七の失たるを初代のお園は心配して或日れ竹のれ園の對ひ花吉さんとの意氣張かられ前の腕

十て千さんと斯ういふ交情よなつたと聞けば野暮な叱言も言ないが是からしつかり氣を持て
八世間の人の笑はれ艸にならないやうに氣をお付と言はるゝ意見がドックリとれ園の胸にこ
たへた故是非最う一度は安心をさせねば義理が立兼ると種々に心を痛めるうち初代のお園
松は急症にて俄然に病死したる故今のれ園の愁傷は何に比喩ん方もなく幼少ときからお世話
よなつた御恩報じをせぬのみか餘計な事で御苦勞さで掛た此身を何とせう責ては葬式丈に
竹ても立派にせねばと思ふより現今困苦の中ながら種〳〵にして金を調へ他人よ指をさゝれ
梅ぬやうに埋葬も取行つたが扨此金の償ひ方が何樣工夫しても出來難さに餘儀なく其身を新
吉原なる山口德左衛門といふ遊女屋方へ二百五十圓よ沈めた金よて這回の借財をも濟せ千
三次郎よも幾十か分て唱妓の勤めをして居ると話說昏つて姉のれ松は例の子傅に住込だが年
は行ねど艱難の瀬を渡つて來た程あつて初奉公も難面と思はず立働きよも身を入れるを主
人人西倉彌左衛門も夫婦俱々目を掛て遣り聞けば母も世を去て賴り渺なきよとなればとて終
娘には妻の妹分とし往〳〵は何れかへ緣付呉んと言いるハにれ松は主人の恩義を感じ下婢の
中に加はりて長の年月此家に在しに同家に手代を勤めてゐる松浦惣吉といふ者が日來れ松
に心を掛て人なき折を覗ては袖裾などを引かるれどれ松は風に柳と受て寄らず障らず外し
て居るを惣吉はもどかしがり或夜お松が湯よ行たるを途中よ待受け引捕へ辭を盡して口說

た上斯ても厭と言ふならば和女を殺して自己も死ぬと飽まで手强く言いるゝを婦人心に怖
氣立ば濟ない事とは知りながら餘儀なく辭に從ゐ因果の胤を身に孕せしにれ松は胸に苦を
松增て獨り心を痛むるを去とも知らぬ惣吉は或夜窃かに首尾を窺ひれ松の部屋へ忍び來て猥
褻咄しを仕掛るをお松は禁めて涙ぐみ今となりてはお前のみ恨みて愚痴も言はれねどお前
竹の無理を通させて御主人さまのれ目をかそめ大ろれた事した罰が忽地私の身よ報いお腹よ
兒を孕したからは御恩を受た旦那さまや御新造さまに何とまアれ詫の爲やうがありませう
梅ぞヤ譯には命を捨死ぬと覺悟を爲ましたからい緣よ繫がるお前ゆゑ思ひ出したら一遍のど
うぞ回向をして下さいとしみ〳〵言はれて吃驚せゝ惣吉は膝立直し扨は和女は懷妊とか夫
三はあんまり速かつたと言たばかりにさし當り別に思案も出ざりげん頭りに額を撫廻すのみ
因り果たる其折しも部屋の口に〳〵寄たる隔の障子の明たる音よ二名い驚き見返れば思ひ掛
人なき主人ゆゑ吐嚏とばかり仰天して覺ゐず顏をおし匿そを然こそと察せし彌左衛門は袖を
娘掩ひて携へたる雪洞の火をフッと吹消し其儘部屋へ立入ながらコレ二名とも遽ぐまい今更
敗め言ふでいなけれど惣吉の親公といふは川崎驛にて遊女屋渡世松浦定右衛門といふれ人
十だが和主が若氣の遣ひ過よて大きな穴を明たるを親公が嚴しい腹立にて追出すとまで言は
九れたを自己が懇意な中ゆゑよまア〳〵短氣はなさるなと預かつて連歸り矯直さふと店へ置

二十

き手代よ加へて使つて見ると自己の意見が身よ染たやら夜遊びもせず辛抱するを言甲斐あり

と歡ぶうち近頃お松と何とやら怪しい素振を見認たゆゑ倘も是等の事よりして無分別でも出して日ならねば篤と意見を加へて遣らふと猶も動靜を窺ひしよ今宵窃かに惣吉がれ松

松

の部屋へ這入た体ゆゑ跡から忍んで來て聞けばお松は既よ懷妊なし言譯なさよ死ぬとまで決心なし、体たらく仍て倩〳〵思案をするにお松は妻が妹分とし往〳〵は何れへか緣付呉

竹

んと思ひしなれば今懷妊とまで聞たを引裂んも憫然ゆゑ夫婦よ致し得さすれば安堵しやれと說諭して其後幾程もあらざるに同町に家を設け渠等二名に世帶を持せ惣吉は尙元の如く

梅

通ひ勤めをさせたるをお松は素より惣吉も主人の好意を歡び居るうち或時川崎の實家より

三

父定右衛門が急病との報知に惣吉は駭きて彌左衛門の許しを受け急ぎ川崎へ至りて見るにはや息絶し跡なれば不孝の所業を深く悔めど又今更よ詮術なければ葬式も手厚くなし他よ

人

兄弟もあらざる故惣吉が跡目をば相續をする塲よ至りて彌左衛門が口を添へ改めて我が實家になりてれ松を同家へ遂り入れるとお松は程なく產の氣付て男の子をば分娩したるは愛

娘

ひの中の歡びと家内も愁眉を開きしとぞ

○第五回

茲に本所相生町に小間物を渡世にして相應に活計たる谷村角造といふ者あり妻のお花と喚

る、は舊が娼妓をせし故よや夫婦となりて年を經ども子といふ者の絶て出來ねば迎も實子はあるやうしければと男の子をば二名まで他から貰ひて養ひしかど何れも虫氣で亡ひしかば此上は女の子を貰ひもしたら滿足に育つ事もやあらんとて既よ前号にも載たる如くお君の

松

三女お梅をば他の周旋にて養女に做し、に虫氣もあらで生長なすにぞ夫婦の歡び一方なら

竹

ず挿の花と慈愛て追〳〵諸藝を仕付る中にも物書が第一ぞとて同町の手習師匠へ幼少頃より通はせしよ是も同所に富饒よ暮す岡田何某の長男福之助も同じ師匠の許へ通ひて色のい

梅

ろはの昔初より俱よ机を交へしより自然と中の睦ましさを他の子供等が仇口にれ梅さんと

三

福さんは夫婦のやうだとなぶらる、を幼心に恥かしくも嬉しく思ひ居たりしが結ばる縁の糸口にやれ梅が既に十六七福之助は十八九の頃早晩解けし下紐の關に人目を忍びつ、怖

人

〳〵ながら樂しみ居たを夫とも知らぬ双親は娘も最早年齡ゆゑ一日も早く相應なる婿養子をば貰ひ受け後の安堵を計らんなど心搆へをするうちフト大事の起りしは或とき瑯て懇意

娘にする彌吉といふが來ての咄しに斯ういふ旨い事があるが私一人の腕にては何分骨が折過れば一番乘て見なすつていと蜜に砂糖を交たやうなる堪へられない相談を何か竊かに囁き

二

示すを常には斯る山事などよ手を出すやうな角造ならぬも慾には迷ひ安き物にてとう〳〵

十

一渠が辭に乘り我が身代よ餘る程なる借財をして資よ入れ十が十まで大儲けと思ひ込だる目

二十二

途が外れて丸〳〵損をしたるゆゑ降て流たる大困難日々に借金方からは嚴しい責を遁るゝ道なく夫婦の衣類は言ふに及ばず嫁取准備ゑ調へたる娘が時着ろの外をも賣盡したれど引足らぬゑ家内の手前も面目なき角造は百般〳〵と氣を痛めたが身体ゑ障り忽地重き枕に着

松

しに妻も娘も心配して醫師ゑ藥と手を盡せゑ又一層の入費もありて困苦を重ぬる其中へ債方の一人たる増田何某といふ者が大八車を曳せて來り今日返金が出來ぬとなら約定通り家

竹

財をば持て行から然う思へとて夫婦が種々ゑ詫るも聞ず鍋釜ろの他も繩からげとなし病人の寐て居る側の疊を揚ゑ掛るのを餘りの事とれ梅が見かねてまア〳〵待てと泣て留たる當

梅

下増田は目に角立金が出來ねば家財雜具を渡せと堅い約定ゆゑ持て行のゑ不思議はあるめ

三

へ日の短かいに彼是と邪魔をされては迷惑だ开所を退なと突放し尙も疊を揚んとする其手にれ梅は縋り付き決して貴郎がお持なさるを御無理な事とはぞんじませねど病人の寐て居

人

ります疊を剝ぎやうにては親の病痾は重るばかり爰の所を推量ありてれ慈悲にどうぞ今須臾と賴むを聞かず頭を打掉り他が轉倒て死なふともろんな所へ輦着して金貸渡世がなる物

娘

か夫ともれ前が其金を耳を揃へて返す氣か迚も逆さゑ震つても鼻血の外は出さうもない此身代をペン〳〵と何時まで待て居られる物か嘘も毎日閑倦た放しなせへと振切られお梅も絶体絶命と胸を定めて涙を拂ひ成程私が其お金を乾度れ返しゆしませうと言ふに増田は冷

笑ひコレ戯言なら止なせへ鐵漿壺の中にある鐵漿とは譯の違つて居る元利合せて七十圓夫がどうして出來ますチト言ふをお梅い聞あへず开所が貴郎と御相談二三日待て下されば私

松

の身をば苦界ゑ沈め元利揃へて間違なくお返し申します程に何卒夫まで御猶豫をと思ひ入つゝ言ふ顔を打見遣り又黙頭て其縹致なら七十圓は捨賣ゑしても出來やうから夫程堅く言

竹

ふ譯なら待にくいのだか明後日まで勘辨をして進やうが其時違ふと聞かねへよ宜か〳〵と期を押詰て立歸つたが其跡にてお梅はホット太息吐く側へお花がさし寄て手詰の返辭ゑ困

梅

ればとてお前の身をば苦界に沈め返金しやうと約すとはあまりと言へば思ひ切やう是が私の產落しと娘といふ譯でもなく开所には義理もある物をと言へばお梅は手を下て親の許し

三

も待たずして出過た事を言ふ者と思し召でもござりませうが手詰になつた七十圓尙その外ゑもれ醫師さまの藥代其他も不義理ゑなれば何卒私の身を賣て此場の難儀二ッゑい阿父さ

人

んの御病氣をも速く癒して下さいましと言はれてお花も今更に禁め兼つゝ猶豫を病苦の中娘にも角造は我を忘れて枕を離れお梅が厚い志操は身にしみ〳〵と嬉しけれど養女に娼妓にさせたりと世間の人に言はれてはと義理を立扨く養父の辭をお梅が種々ゑ說慰めたる其孝

二十三

心も捨られぬゑ到底手詰の金にも困れば夫婦は憫然さ限りなけれど終に娘の意に任させさて住込せるろの先をと人を頼みて尋ねしゑ妙な奇遇もある物ゑて川崎驛の遊女屋なる例の

二た松の嫁して居る松浦惣吉方よれいて娼妓が抱へたいとの事ゆゑ早速目見に遣はせしよ幼
十四少時に別れしゆゑ姉も妹も面變りして互ひにろれとも氣は付ねど縹致の美が心よ適ひ二百
圓にて抱〻んとの相談頓に整ひたればお梅は一先立歸り其夜窃かに福之助に會ひ義理ある
松親の手詰の金よ餘儀なく妓業をしますれば堪忍してと打詫置て其次の日よ母に送られ再び
竹川崎驛に行き證書萬端事を濟せ身の代金を受取て母のお花が歸り掛るをれ梅は店まで送り
出て私が居ねばれ前の手一ッ嘸やれ骨も折やうが阿父さんの看病を今のお金で充分にと呉
梅〻賴みなどするを必ず案じて呉るなとお花が泣〻立別れしを格子の許よ彳み居たる雲
助体の怪しき奴が何か頭りよ點頭つゝれ花の跡を付來たり鈴ケ森なる涙打際の人足途經し
三折を窺ひお花を突然に突仆し吐嗟と駭く懷中へ會釋もなさず手を差入首に掛たる金貨布を
人有無を言せず引出しゝ此段落は何となるか开は又次回を看て知らん

第六回

娘お花い娘の身の代金を命に換ても奪はれじと必死となつて爭ふを强情阿魔めト又蹴仆して
フッゝり切れる貯布の紐を是幸ひと曲者が金を握りて駈出るを夫取れてはと狂氣の如く尙
もれ花が追行しに孝女が心を盡しゝを天も憐み給ひけん慌て逃る曲者が覺えず木の根に爪
突て倒るゝはづみよ肋を打けんウンとばかりに悶絶なしゝよお花ははやくも駈寄つて我が

二財布をば取戻しヤレ嬉しやと思ふ間も須臾の猶豫もなり難さよ一目散ヨ开所より走りて無
十六難に家ヨ立歸り本夫に件の金を見せて安堵させたる其上ヨ増田その他の借財をも夫々に形
を付け其後は良醫の藥を請て看護も等閑ならずしたるが更に夫等の甲斐もなく漸次に角造
松の病惱増長て終に亡しくなるのみかお花も是等の氣落から病を常なる身となりしが是も醫
竹藥の効驗なく幾程もなく世を去たれど他ヨ世話をする親族もなさにれ梅が尚も前借金の借
梅増をした金をもて葬式なども濟せたが既ヨ前ヨも言ふ如くお梅は同家の女房を姉のれ松と
娘毫知らねば頼りと思ふ養父母ヨ死別れしヨ力を落し心細さの餘りより幼少頃から馴親しみ
たる彼福之助が戀しくなり迄までは大事な身を放蕩者にさせてはと情夫の爲を深く思ひて
三態と便りもせざりしが其耐忍もッヒ成かねて一寸なりとも顔見せてと久ヨ認め言送りしに
人是より先に福之助もれ梅と本意ない別れをしてより逢たく思ふ心は絶ねど是まで娼妓貧な
どはした事のない生息子なれば尋ねて行も間の悪さにッヒ夫形ヨ日を送りしに測らずお梅
の久を得て飛立やうに思つた故或日大師へ參詣と親の前を言做して用蹄羅へ遣て行き氣味
娘悪〳〵と登樓してれ梅ヨ口を掛たるを如何なる客と出て見れば日來焦がし情夫ゆゑお梅は
オヤと座に入て恥がしい身になりたるも今は忘れて縋り付き積る咄しの數〳〵に春の永き
日語り暮して灯ともし頃になりしがば初心な氣ゆゑ宅を案じて遽はしげヨ身仕度なし又其

うちヨと歸り掛るをお梅も無理とは思ねど如何にも別れの惜さるればまア最う少しも引る
、袖を心ならずは思へども振切かねて又元の床へ這入バ夜も更て歸る時刻を失なふより詮
松方がないと夜を明せば漸次ヨ度胸が落着て其翌日も流連と二階ヨ馴染が付て來る程又而白
さも一層にて終には内を外ヨそるか氣ばかりしと最初はれ梅は福之助の身を大切に思ふよ
竹りお宅の首尾もあらふからと諭しヨ歸しはする物の戻せば直ヨ戀しさの堪へ性なく遣る久
を見る福之助は猶更ヨ家に心の落着ねば親の意見も空吹く風と窃かに金を掘み出しては遊
梅興ヨ現を脱もにぞ既に叱言も言盡したる父何某ば持餘し戀しめの爲或親類へ預けて他行も
さし禁たるを开所をも間もなく飛出したるヨ親父も殆〳〵愛想をつかし最う我が家へも寄
三せつけねば親類方でも門端をも決して踏せて下さるなとまで觸廻したる腹立を福之助は傳
人へ聞けども尚眼のさめる体もなくお梅の許へポンヤリ行てとう〳〵斯ういふ身ヨなつたと
咄すヨお梅は吃驚したれどそれも私がした所爲なれば必ず苦勞をして下さるなお前獨りは
娘何樣にもして吃度れ客に仕通しまもとて其後は晝夜福之助を我が部屋ヨ呼入れ置て揚代ろ
の他も立引ど樓主は勿論所々方々へ不義理な負債も漸次ヨ殖る衣類も質ヨ遣繰て肌薄な身
二となるまでに盡す實意の福之助も最悶然とい思ひながらも離れ難なき情慾にッヒ放心〳〵
七と日を送る此家の二階廻しにてお金といへる底意地悪さが始め纏頭の貰へる頃は莞爾〳〵

三十　物よて語魔を摺しも扨斯うなると目廉を付けお梅にあんな貧乏神は些とも疾く突出して又と再びれ呼でないと愛想氣もなく言做そを譏理よもろんな不人情はとお梅がグヾ〳〵澁つて居るにお金は忽地腹を立お前の口から言はれずば私が立涙ヨ斷るから他から口をれ出し

松　でないとて癒て福之助に打對ひお前さんには揚代金のまた澁滯もあるのみかれ梅さんの部屋の裡には何だか厭な油虫が來て居るといふ二階の暖が直ヨ世間へ廣がつて他のお客にまで障りヨなるれ前も宜氣で娼妓衆の油を吸ふが外飾でもあるまい最う是切ヨ二階に置くは

竹　お氣の毒だがお斷りゆゑキリ〳〵歸つてれ呉なさいと會釋もなげに追立るを身の不始末に

梅　福之助も今更腹を立れもせず面目投首歸り掛るを此時までも傍に口惜涙にくれ居たるお

三　梅は屹度思案を定め硯引寄せさら〳〵と何か一筆書たるを今立歸る福之助の袂に窃に入たるを門に立出披き見れバ同驛の旅人宿川村屋といふ方に二三日泊て居て下さい萬事は跡で

人　と認め有にゞ心ならずも福之助は同家ヨ至りて逗留なしお梅の後の便りをば案じながらに

娘　待て居るとお梅も今は余儀ない場合と心に決せし事あれば態とお金の氣を弛させに日の暮れ間に化粧なゝなし常ヨ替らず店へ出しが斯する事二日ばかり折から初會の客が揚り殊ヨは一座も多人數ヨてドサクサとする騷ぎに紛れお梅は庭の切戸口より人目に忍び脱出した

○第七回

る此段落は何とかなる开は又次回ヨ說べし

恁てお梅は庭口より窃かに忍び出つゝも彼旅人宿の川村屋に至り福之助をば喚出して前

松　獨りは何樣にもして屹度私が呼通さふと思ひ込では居ましたなれどお金どんが邪權幕では迎も此先れ前さんを二階へ揚る事も叶はず然うかと言て此儘に遠退く心もありませねば何

竹　所へなりとも私をば連て逃て下さいまし一日なりと夫婦ヨなり添遂られぬ其時は死ぬと覺

梅　悟をして居まをれば憫然と思つてコレ申し些とも疾く此塲をばと涙と俱にかき口說れ福之

助　とても今更に別れともなき心より深しい思案とてもなく和女が然いふ了簡なら當は無れ

三　ど東京へ行た上でさ一工風と言ふ間も遑人の氣遣はしさに急ぎ手に手を携へて六鄕川の渡し塲へと無分別にも走行く折しも松浦方ではお梅さんが二階ヨ見ゑぬと言出したるより例

人　のお金が猿眼をして樓主へ斯と報告しかば主人惣吉も駭いて直さま店の妓夫ろの他出入の者に吩咐手配を做しつゝ遑人を掛しが六鄕の渡し塲にて二名を見付當たれば野郎に搆はず

娘　大事な玉を逃さぬやうに捕まへろと駭き騷ぐ福之助を邪魔をするなと押退け突遣り死でも私は歸らぬと泣叫ぶお梅をば手取足取連歸りて其儘一室の裡へ押籠め張番させて夜を明し

三十　次の日れ金がお梅をば引摺立て庭へ下立有合ふ立木へ縛り付け常より怖い目を剝出し此間

一　私が物和らかに言たをれ前は茶ヨ受て家出をするとは呆れた根性癖い思ひをさせでもせず

三十二

三ば曲つた心は矯直されまい他の娼妓衆への見せしめに斯うして遣と言つゝも准備の笞を振上て所業はぬ滅多打にれ梅は口惜く思へども身に誤りもある身ゆゑ涙の聲を震はして寧のこと殺てと叫ぶの外に術なきをお松は夫と聞付て餘り手荒なをと思へば驚て其場へ立出て

松　れ金が尚も打んとする笞を須臾とれし禁め這妓に悪い事があらふと然までにせずとも宜からふにと言ふをれ金は耳よも止ず奉公人の叱責をするは二階廻しの私の役目殊に旦那のれ

竹　指揮で根性を直す折檻をれ内儀さんのお辭でもハイと言ては居られませんと又立かゝるを

梅　問へ止め昔と今は事變り縱ひ抱への娼妓でも手荒な事はならぬ時節若打所が悪くつて殺さぬまでも不具にでも這妓を萬一する時は店よも係はる大變が起ると言ふに氣の付ぬか私が

三　トックリ言聞を悪い思案を止させる意見の爲やうもある程よ萬事は私に打任せ和女は部屋へ立歸りまア休息でもするが宜いハテ旦那から澁が出やうとれ前に難義は懸ないよと言は

人　れてれ金はさし當り返す辭もあらざれば何樣とも勝手になさるが宜と面膨して立て行たる其跡にてお松は日來内外の者がお梅さんはれ内義さんと顔が眞に能く似て居て瓜を二ッに

娘　したやうだと噂をするが耳に入て思ひ廻せば年齡と言ひ名さへお梅といふからは若妹では

と氣は付たれど迂濶な事も聞かれて折もあらふと待うちに今日此場合に臨んだ故れ金が手荒な打擲を禁めて渠を追遣りたるあとよれ松は縲絏られたるお梅の繩を手疾くときて勞り

ながら一室へ連込みとんざ手荒なことをされ何所ぞ怪我でも爲はせぬか是とても一向にお金が悪い計でなく實はれ前も了簡違ひ尤も迷ふは道理ゆゑ深みに入ると跡先の考へもなくなる物だが氣を落着てまア お聞き那福さんとかいふお客も親公の前が不首尾になり家の出

松　入もならぬとやらお前が眞實其人を大事に思ふ譯ならば意見をしても耐忍させ元の身分にして進て時節を待てば末永くお前も添はれる事もあらふよ今別れては一生涯會れぬ物のや

竹　うに思ひ逃亡をした其上でよしや追人に捕まらずとも先よ落着く目的がなくば果は互ひに生命を縮め世間の人に死恥を肆しも多くあるならひお前は先頃親親を亡つたとの事は聞た

梅　が他に兄弟も親族もないか私は丁度お前のやうな妹を持る居る故よ他人のやうよは思はれ

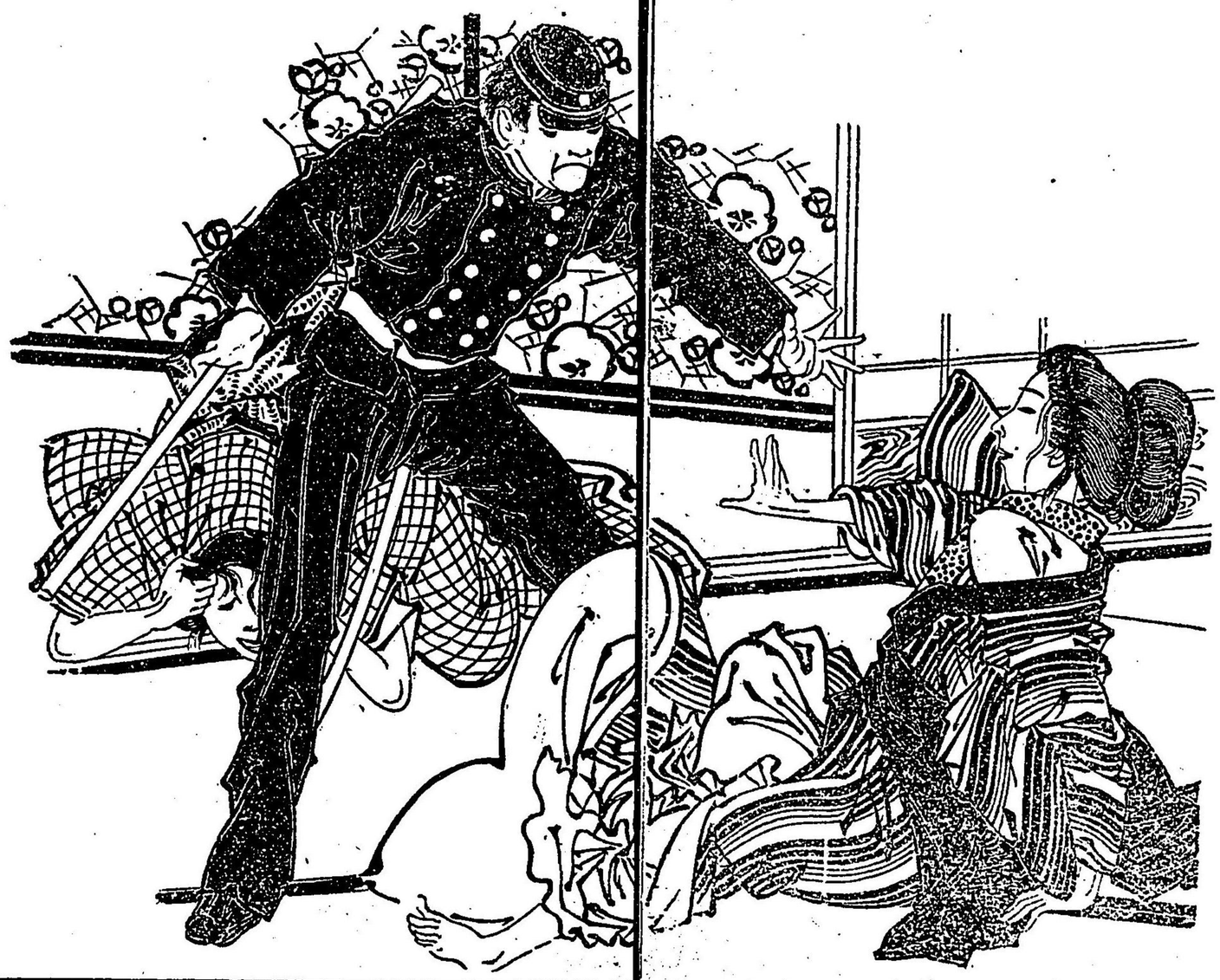
三　ぬ品に依ては往〳〵の相談相手にならふから明して宜くは身の上の咄しを序よれ聞せと眞

人　實見ゆるお松の辭を只泣沈みて聞居たるれ梅は僅かに涙を拂ひお内義さんの御意見が骨身よ染て有難さよ恥かしながら打明す私の素性は恁〳〵と一伍一什を物語り其頃姉が二名ま

娘　でありとは覺えて居りまされど幼少時に散〳〵よ別れて後は生死も知らぬ私の心細さを憫然と察して下さいましと言ふにお松い打駭き扨は妹か懷しやと言たい胸をおし鎭め今此場

三　にて同胞のなまなか名告をする時は却つて互ひの身の爲ならずと夫と口へは出さねど妹と

十　知れば猶更に無分別をば出さぬやう或は誡め又は慰め心の限り說諭し、よゞ其深切に絆さ



三十六

れて情太のうへも氣遣はしけれど再び家出の念を斷ちれ松の意見ゑ從ひ居ると話説替つて福之助は六郷川原でれ梅をば追人のものに連行かれ吐嗟とおもへど詮術なさに獨り川邊に彳みて手を組みつく〳〵思案をそるゑ若も此身に添はれずば死ぬと決した渠が一言追人に

松

引かれて行たる上は安穩で居る事はあるまいお梅に生命を失はせ我のみ存命居る時は義理ゑ背けるばかりでなく親は素より諸親類にも愛想を盡されたるからは今更何の面目ありて

竹

阿容〳〵として居らるべき寧の事に此川へと迫る心の遑瀬なく既に入水と決せし折から通

梅

り掛りて旅人が不審な体と思ふより寇りし笠を傾けて月の明りに福之助の顔を見るより驚く体ゑてもし貴郎は岡田の若旦那かと聲掛られしゑ驚きながら福之助が見返るうち彼旅客

三

は笠取退て遽はしげに走り寄りれ見忘れかはぞんじませねど私し事は八丁堀の貴郎の伯父

人

公增村徳左衛門さまのれ店ゑ長らく勤めて居る手代善七でござりますが且那の御用で靜岡まで參りました歸掛け見れば夜更に只れ獨りお顔の色も常ならぬは若突詰たお心から。ト

娘

サ申すも孫てれ噂を聞及んだる事ある故時機に依てはれ力に及ばずながらなりませうから苦しからずば打明てと赤心見ゆる手代の辭を面目なげなる福之助も默止かねつゝ額を上噂を聞たとあるからは包藏で詮ない身の不体裁親々類ゑも見放されし果は娼妓を連出して逃る途中で追人に出會取返されて今此狀是も不埒をした罰と思へば此身に愛想が盡て死なふ

松

と決した上からは立歸つた後伯父さまから親父へれ詫を下つるやう願さて呉ろとしほ〳〵

竹

言ふを善七は聞あへず夫は甚だ悪い御思案爰で貴郎が死恥をれ肆しなさる其時は親公さま

梅

のお名も出て不孝の上て大御不孝御改心だに遊ばさば又伯父さまが別段の思し召もござら

三

ふ程に死で再び生れ出たれ氣で是から私と一緒ゑ兎に角東京へと或は諫め又は勵ます渠

人

が辭に福之助も求めて死たい譯ならねば面なきながら伴はれて八町堀へ赴けば纏て件の善

娘

七が主人ゑ斯と事由を告て俱〳〵詫入るにぞ德左衛門も一名の甥を棄て搏はぬ心ならねば慎みてのみ居れば伯父も窃かに歡びて或時渠が両親に綜云々と物語り最う耐忍が出來やう

三

から家へ入てと勸められ福之助の両親も掛替もなき一粒種ゆゑ憎しと思はふ筈がなさゑ德

人

左衛門が辭ゑ從ひ日ならず悴を引取しに根が素直なる生質ゆゑ爰ぞ不孝の詫する時節と親

娘

の心に毫違はず稼業向にも身を入れば安堵なしたる父親が氣の弛みから病付たやらフイト枕ゑ着たるが日を經る儘ゑさし重り醫藥の効驗もあらずして遂に亡しく成行しゑ家内の愁傷一方ならぬも斯てあるべき事ならねば野邊の送りも手厚くせし後更に悴福之助が家相續

三十七

をなすゑ至り此上は阿父さんの日柄も過ば好き嫁をと母が頭りゑ氣を揉を福之助がさし禁てまア〳〵夫は急がずともと言ふ口振が何とやふ心あつての事らしきを母は不審に思ふよ

三十八

りお前が嫁を辭むのは別に望みがあつての事かうんなら然うと打明て介意はないから言ふが宜と母が慈愛の一言に福之助は恥入て元放蕩の相手といふは阿母さんも御存じの谷村の娘お梅よて娼妓になつても實意が失ず私しが此家へ歸參致した其事を何樣して渠が知りま

松

したやら此程彷かに文を送り其歡びを演たる末に此上は御兩親よ是非御安堵をさせるやう御辛抱をば遊ばしてと返すがへも言送つた其志操よ對しても何分妻は貰はれませんと言ふ

竹

を倩〳〵聞母が然までに思ひ合た中なら私が身受を爲やうとて川崎驛へ母が至りてお梅を

梅

受出を事よりして委しい譯は次回に說く可し

○第八回

三

お梅はれ松が深切なる意見の胸よ染渡りしかば情夫の上を案じながらも夫形よ日を送るうち風の便りよ福之助は詫が叶ひて親元へ歸りし旨を聞たるよ是では安堵と思ふより意見の

人

文を同人方へ彷かよ送り届けて後は身儘よなるを樂しみに勸め大事として居たりしよ或日

娘

測らず福之助の母が樓主へ尋ね來てれ梅を身受といふ相談に前借金を調べて見ると一時は多分の追貸をしたるも渠が實明よ勤めて來てから稼ぎ込も多く出來て今の所は百圓にて証書をお返し申すと言ふよ母は直さま金を渡して頓に咄しの行屆きしを夢ではないかと歡ぶれ梅倶よれ松も嬉しさに此妓の身祝ひかたがにと母とれ梅をお松が伴ひ或料理屋よ至りつゝ酒肴など多く吩咐祝ひ酒を酌交しゝ後貰は今まで匿して居たれどお梅は妹といふ事を爰に始めて言聞せしよ是も夢かと吃驚せしお梅は姉に縋り付き歡ぶも又涙なる奇遇に母も駭きて俱に左右辭を添ればお松はまた妹のうくを母に吳〳〵頼みなどしつ艤て共場を立別れ母はれ梅を連歸りて後又かの伯父の德左衛門よ假親と媒妁の二役を兼て貰ひ目出度婚姻をさせたるは明治十四年の九月にて思ひし如く福之助もお梅を妻とせし後は一層稼業も勉

竹

强したれば親父の代より財產を殖し是までの相生町は手狹なりとて他よ讓り八丁堀なる伯

梅

父の地面を買受て新築に立派なる家を設け目下唐物を種々賣捌きて滋〳〵家富榮えしとぞ

三

這は是後の物語りよして扨川崎なる松浦方でも晉らじ繁昌して居たりしが其頃同所へ新顏で出た小吉(九十)といへる藝妓は一時東京柳橋の本場を敲いて來た腕前丈け口も八町手も八町

人

にて顏も何所やら垢脫のせしよ彼惣吉がフイと惚込み折々料理屋などへ呼で醉に紛らし當つて見ると手管に長た小吉ゆえ始めの程は思はせ振に咄しを餘所に言なして充分乘氣にさ

娘

せて後甘く箸をば取らせしなれば惣吉はさし置ず渠を我家へ連込で介慮もなしに妾となえ、をれ松の氣では面白からねど是も男の働きでもそる事ならば詮方もなし兎よ角丸く消光て

三

居たいと假よもわるい顏をせず小吉と奇麗に交際て居るとお心よしを見くびつて漸次に本

九十

妻を尻に敷差出口など叩くのを成丈け胸に納めて居されど默止て居ては法圖がなさに一言

四十二

云へば三言で返す小吉の口の餘り憎さよ遂よは言爭ひになりしを惣吉は聞よりも事の善惡も糺さずして小吉の肩を持のみならず煙管を取て散〻にれ松を打擲したりしかば餘り解らぬ本夫と思ひ口惜紛れよ惣吉の腕よ咬付たので本夫の火の手が高くなり離緣を

松　そるからサア出て行けとれ松い無体に追出され歸るに家もなき儘に詮儀なく本所德右衛門町の元主人なる西倉方へ泣込で斯と咄せば戸主彌左衛門は打驚き那奴にろんな我儘は義理

竹　よ於てもされぬ譯柄ヨシ〳〵自己が一掛合して來て遣から待て居ろとて癒て川崎へ出掛て

梅　行き事の治まる談判を物和らかにして見ても惣吉は聞入れず舊の主人のお辭でも本夫の腕に咬付やうな狂氣阿魔は女房よ片時しては居られませんれ氣の毒だがお斷りと刻付た返答

三　に彌左衛門は腹を立以前の事を考へたら奇麗な口も利けまいよ爲を思つてする扱ひを承知

人　がならぬと言ふからは最う二言とは頼むめへ跡で彼是言ふまいぞと念を押て立歸りし後更に自分が親元となりお松ま立派な支度をさせて横濱伊勢町に家を搆へ或會社へ出勤される

娘　井上何某とか喚る〻方へ縁を求めて嫁せしめしは去十五年の冬にしてれ松は始めに彌增る樂な活計をする身になると夫に引替惣吉方では本妻を出した後は妾が氣隨に押廻せば家内は不取締りになる夫よ進ては客も減て殖るは借金のみなる中よて俄然に惣吉が病死したれば跡の始末が付がたさよ家は他人の手にわたり惣吉の母何某とれ松が產し男の子は親類方へ引取て見る影もなき姿となりしは時運とはいひながら一ッには惣吉がよしなき婦人に溺れたる心のまよひに出たるなるべし扨三人の同胞のうちれ松とれ梅の身は固まりしがれ竹

松　は如何よせしぞといふよ渠は先頃吉原へ身を沈めたる其當座に二代目れ園が娼妓になつたと言ふ評判がたかくなり甲も行て買て見やう乙も行ふと客が落あひ座敷が廻り切れない程

竹　に頻りよ流行て居たりしが或夜初會に揚つた客が酒もあつさり飲だ上床へ廻つた樣子ゆゑ

梅　れ竹のお園は程を見合せ廊下口から部屋へ這入れば件の客い寐もやらず屏風の外に据り居

三　たるをお竹は見つ〻打笑て些れ横よと言ふ顏を客はじろ〳〵打見遣り私は寐るよりお前さんに少し聞たい事があるが若や以前はお竹さんと名を仰しやりはしませんかと問はれてれ

人　竹は訝かしげよ私の實の名を知た貴郎は誰殿でありまそエと問返されて打點頭私の名前も明しませうが夫より先にお前さんのまア身の上から聞たいが介意をせずに何事も委くし咄

娘　してれ呉なせへと言ふは悪意と思いれねばふ竹も今更包藏難さに私は幼少い頃の事ゆゑ委

四　しい譯は知りませねど親は刀の鑑定をする戸田幸左衛門といふ者なりしが人手に掛り亡

十三　たる跡は母と子供で世渡の道を失ひ困つて居るを或人の勸めよ依り山田佐助と云者を手代

四十四

四ヨ雇ふて任せしに何時の間にやら多くの金を引負をしたのみならず母を欺して二百圓握つた儘に家出をされ夫から俄然ヨ零落して同胞は皆散〳〵ばら〳〵私も終に此やうな恥かしい身になりましたと言ふを打聞件の客は形容を改め手を下てれ見忘れでもございませうが

松　今仰しやつた佐助とは面目ないが私が佐助と名告たので吃驚なさるも御無理いないが面も

竹　冠らず來た譯をまア一通り聞て下さい實は若氣の無分別から二百圓といふ金を欺して取て逃はしたれど熱を冷して考へれば今此金がない時は跡の難儀は如何バかりア、惡かつたと

梅　氣が付た故詫てお返し申さふかと思つてゝ見た物の只二百圓ばかりでなく他に引合もあるから是で濟べき事ならずと胸を痛める其うちヨフイト心に浮んだは近頃流行米相場もし

三　も運よく行とさはれ詫の種にも取付けやうかとこは〳〵ながら手を出したが僥倖の向く時節やらトン〳〵拍子に利益があつて大きな金が手に入れば爰がお詫の仕所と人をたのみ

人　娘でれ宅へ上れバ早晩れ店は退轉して御内義さんにもはや御病死嬢さま達のお行方も知れい

娘　といふヨ深く驚きいよ〳〵此身の非を悔めど今更術もなき儘にツヒ夫形ヨ年を經たるに程人の噂には幸左衛門さまのれ娘公れ竹さんと仰しやつたのが一時二代目れ園と喚ばれ妓になつて居られたが故あつて吉原の是なる店ヨ憂勤めと聞て再び驚いたが兎ヨ角お目ヨ懸つたら深い樣子も解らふかと思つた念が届いたやら實に不思議な御對面他の御姉妹のお成行を御存じないとあるからは是は餘儀ない事なる故貴孃のれ身を受出して戸田のお家を

松　再興するが責てもの謝罪し過つる私が誤りは阿母さまのれ位牌へ倶どもれ詫を願ひまと

竹　赤心明す佐助の辭に驚きもすれば嬉しくもあれば萬事を渠が意に任せた故癒て佐助は樓主

梅　へ掛合れ竹の身受を奇麗ヨして我が住む淺草平右衛門町へ伴ひ歸りたる後に猶同人の靈力

三　にて同町に家を設け戸田の家をば再興したるが女戸主でも如何と思ふヨ此時までも彼千次郎をお竹が窃かに仕追りをして他ヨ躲ひ置と聞たる佐助は是を幸ひと入船町の加賀屋へ千

人　次郎をば貰ひ受たい嘶を段々仕掛ると今は親父は世を去て母のみなれバ取別て我子を案じて居る事ゆゑ此相談に歡びて早速に事整ひ戸田家の相續人として目出度お竹と婚姻をせし

娘　は去十二三年の頃の事ヨて最初は佐助が指揮して親の稼業を捨させまじと刀劍類の渡世を

四　させしが當時ヨ向かぬ稼業なればと後は紙類に渡世を替へて夫婦が家業に身を入れる故漸

十五　次に店も賑はひしかば佐助も今は安堵して或日妻のお辰に吩咐お竹の外に二三人連れ新富

四十六

座の芝居をば見物に遣わしゝよ隣座敷よ來て居たるが例の横濱のれ松夫婦で幼少い時よ別れしかど何所やら覺ゑのあるやうに互ひに思ふ所から烟艸の火をば借たを機會に段〳〵咄を仕掛て見と同胞なるに且驚き且歡びはしたれども芝居の中では打解て言にくき事さへあれば打出て後お松の茶屋へお竹とれ辰を招ぎ寄せ馳走の酒の間から積る咄しの數〳〵よ

松

竹りれ梅が上さへれ松が語れバれ竹は佐助の深切を咄してお辰を引合する是等の事よ夜も更れば程〳〵よして其場は別れ更に横濱の井上方へれ竹お梅を招き寄せ佐野茂の料理の大饗應よ松竹梅の三姉妹が顔を合せる嬉しさは筆にも爭で盡さるべき看客宜しく推すべし這は

梅

三

是去年の夏の事よて其後も三家睦ましく今なほ絶ず往來をなすとは最も愛度結果なりし

人娘

松竹梅三人娘終

明治二十二年十月九日印刷
同　年十月十二日出版

（定價金五拾錢）

發行者　日吉堂　菅谷與吉　神田區元岩井町三十七番地

印刷者　龍雲堂　大塲沃美　神田區柳原河岸第十一号地

大賣捌所

上田屋榮三郎　金櫻堂
大川屋錠吉　井上勝五郎
辻岡屋文助　明進堂
山口屋藤兵衛　近江屋園吉
春陽堂　大黒屋平吉
共和書店　木屋宗次郎

日吉堂新刻出版書目錄

雲霧阿辰青木夕榮　全正價金十錢
刺繡小常綾女丈夫　全仝　金十錢
人情美談野路之花　全仝　金十錢
大岡政談於富與三郎實記　全仝　金十錢
名譽長者鑑　全仝　金十錢
慶應水滸傳　全仝　金十錢
廓雀小稻出來秋　全仝　金十錢
姫萬両長者鉢木　全仝　金十錢
敵討裏見葛の葉　全仝　金十二錢
昔語千代田及傷　全仝　金十二錢
皿皿郷談　全仝　金十五錢
女天一花園於蝶　全仝　金十五錢
鈴木主水實説美談　全仝　金十二錢

文覺上人物語　全正價金十二錢
濱邊の荒濤　全仝　金十錢
春色日本魂　全仝　金十錢
一舍時雨笠森　全仝　金十錢
成田山力士仇討　全仝　金十錢
駿甲俠客濱松風　全仝　金十二錢
東俠客河内山實傳　全仝　金十五錢
南柯奇聞淀屋辰五郎之傳　全仝　金十五錢
明治水湖傳　全仝　金二十錢
佐和理集大全　全仝　金五錢
端唄都々一集大全　全仝　金五錢
文句入都々一集　全仝　金五錢
清元常磐津佐和理集　全仝　金五錢

特49
897

松竹梅三人娘

国立国会図書館

091381-000-8

特49-897

松竹梅三人娘

日吉堂

M22

DBN-2283